

企業訪問

Interview



こまつざき やすひこ
代表取締役 小松崎 泰彦

COMPANY DATA

株式会社アブクマ

所在地 【本社・小野工場】田村郡小野町大字皮籠石字鶴庭55-12
【いわき工場】いわき市川前町小白井字精才73-1
TEL:0247-61-6810
U R L https://jp-abukuma.com
創業 1927年8月
事業概要 資本金 6,350万円
建設機械部品・トラック部品製造
TEL:0246-84-2041
従業員数 274名

株式会社アブクマ

～阿武隈高地において 地域の雇用に貢献し続ける 首都圏で創業した福島県内企業～

福島県は首都圏に近く、アクセスの良さ、優れた人材、充実した支援体制が整っており、企業誘致に力を入れています。株式会社アブクマは1990年代に首都圏から工場進出し、地域に根付いて発展、2019年には本社も本県に移転した企業です。本県のモノづくりを支えるとともに、地域の雇用の場としても大切な役割を果たしています。

今回は、当社いわき工場事務所で、小松崎泰彦社長に事業内容や本県に移転した経緯などについてお伺いしました。

■一貫生産体制での建設機械部品・車両部品の製造

— どのような製品を作っているのですか —

当社は、国内トラック完成車メーカー、国内及び海外建設機械メーカーのティア1サプライヤー[※]として、多様なニーズに対応しながら設計から組み立てまで一貫生産を行う会社です。具体的には、建設機械部品として、燃料タンク、作動油タンク、カバー類等の外板部品、トラック・バス部品として、バッテリーボックス、シャシー部品などを製造しています。

プレス加工、レーザー板金加工、溶接、機械加工、塗装まで一貫生産体制で高機能・高品質な製品を提供しています。特に大型の建設機械部品にも対応可能な塗装ラインがあり、お客様の細かなニーズに応えることができます。

※ティア1サプライヤー…自動車メーカーに直接部品等を供給する一次下請けの企業を指す。

■1927年に東京で創業、1993年に福島県に工場進出

— 貴社の沿革について教えてください —

当社は1927年に東京の四ノ橋（現在の港区白金）で合資会社石井製作所として創業しました。当時は創業家2～3人の町工場で、軍事産業的なものを扱っていたそうです。その後、1956年に株式会社石井製作所に改組、2005年に現在の株式会社アブクマに社名変更しています。

その間、1961年に神奈川県川崎市に移転、福島県には1993年にいわき工場（福島県いわき市）、2017年に小野工場（福島県田村郡小野町）を設立しており、2019年に本社を小野工場に移転しています。

■20年間の他業種勤務を経て当社に入社

— 小松崎社長の経歴を教えてください —

私は2014年に当社の5代目社長に就任しています。現在は住民票も田村市に移し福島県人ですが、元々は東京都の世田谷区出身で、福島県に縁

は無く、前職は都内にある企業に20年ほど勤務をしていました。その私が何故、当社に転職したのかと申しますと、我が家が創業家と姻戚関係にあったことから私の父が3代目の社長に就任したことが事の始まりだと思っています。その後4代目社長より「うちに来ないか」と誘われました。はじめは入るつもりは全くありませんでしたので、3年間ぐらいは話があっても断っていましたが、父が社長であった株式会社アブクマへの思いは、当時からかなり強かったのだと思います。その結果、私が42歳の時に、一般社員として入社をさせて頂きました。

■負債削減のための川崎工場売却に伴い、遊休地を活用し新工場設立

— いわきに工場進出した経緯についてお聞かせください —

福島県に工場を設ける前は、神奈川県川崎市に工場がありました。いわき工場の土地は、二本松市に大手自動車メーカーが工場進出するという話があつたことから、1972年に山の中のこの土地を2代目社長が購入していました。結局、大手自動車メーカーは進出せず、3代目社長をはじめほとんどの社員がこの土地を保有していることを長らく知りませんでした。

1990年を過ぎたころに、会社の負債を減らさなければこれからの経済情勢を乗り切れないということで、川崎工場を売却していわきの遊休地に工場を



川崎工場時代から稼働する1500トン大型油圧プレス機

作ろうということになりました。川崎から移った社員、新たに現地採用した社員など合わせて60名ほどでいわき工場をスタートしています。初めはトラック部品だけでしたが、建設機械部品も集約し最終的には2004年に川崎工場全作業のいわき工場集約が完了しています。

昨年、小野町からいわき工場付近を結ぶ復興道路が完成し、交通アクセスが大幅に改善されました。それまでは狭い未舗装の道路を通るか、大きく迂回して工場までくるかで大変だったと聞いています。

■大ピンチに陥り、思い切って投資する賭けに出た

— 2017年に小野工場を設立された経緯についてお聞かせください —

主力のお客様である外資メーカーが日本での車両組立を2015年に止めるとの発表が2011年11月にありました。当時の弊社の売上高は同社を含めた2社で半々ほどの取扱いでしたので、その半分が無くなるという非常に厳しい状況に陥りました。そうなるとお客様を開拓しなければなりませんが、アピールポイントになるものがなければ新たに取引はしてもらえません。

建設機械メーカーが部品工場に求めることは何だろうと考えてみると、同じ工場、同じ会社により、一気通貫でモノが出来ることだということになります。そのためには当社にどこにも無いような塗装設



レーザー加工機で金属を綺麗に切断



工場内は先が小さく見えるほど広大な広さ

備があれば一貫生産体制がさらに向上します、新たな会社に取引していただけるのではないか、どこの会社（同業他社）にも負けないのではないかとの判断から、小野工場の建設という結論に至りました。

■震災復興に貢献したいという強い想いを以前から抱いていた

— どのような経緯で小野町に本社を移転したのですか —

東日本大震災を経験して、福島県の復興に貢献したいと常々思っていましたので、小野工場を設立したことが良い機会と思い、2019年に本社を小野工場に移転しました。

リーマン・ショックの時は会社が潰れるのではという状況でしたが、「全世界全社が悪いのであって、うちだけが潰れるものではない」という確信がありました。震災はピンポイントで東北、福島県だけが悪いという状況です。弊社は福島第一原発から円を描くと31.7kmにあります。30km以内でしたら避難指示が出ていましたので、僅か1.7kmで避難する必要はなく助かったわけです。震災では多くの方が亡くなり、避難生活を余儀なくされた方、廃業された企業が多くおられます。これが30km以内にあれば、今頃当社は無くなっていたかもしれません。

この福島の地で仕事をする我々は、企業を継続していくことが最大の恩返し、継続するということは雇用、この地に若者を引き留めること、県外に出た

方が戻ってきて働く場所としたい、福島の若い人たちと一緒に成長したいという福島県への想いと製造業は常に現場が隣になければいけないという理念から本社の移転を決めました。

■取引先の支援と従業員の頑張りで乗り切った

— 震災の時のエピソードをお聞かせください

震災のあった3月11日は（メーカーの）会議に出席していましたので、神奈川県にいました。地震で会議は中止となり、会社に電話をしてもつながらず、東京から電話をかけ続けました。夜8時ぐらいによくやく当時の総務経理課長に電話がつながり、怪我人がいないこと、壁や天井が落ちたことなど被害状況を確認し、翌朝7時半ごろに車で東京を出発しました。高速道路は止まっていましたので、国道4号を走り、田村市の自宅に着いたのは夜8時でした。

3月12日は休みにも関わらず社員が出社し社内清掃等々をするなど皆がよくやってくれましたし、お客様（メーカー）や取引先の方々が何社も水や食料など支援物資を持って東京、神奈川から駆けつけていただきました。そのような中で、3月14日の福島第一原発の水素爆発です。当時は原発から何kmなのかわかりませんから、ここは避難指示区域になるのか、そうなった場合どうすればいいんだと社内は騒然となり、とりあえず1週間休業することとしました。



職人+ロボットで製品を製造



ロボットが自動で溶接

従業員たちも早く仕事を再開したかったようで、ガイガーカウンターを購入して放射線量を計測して、当社所在地の放射線量が低いことを確認できましたので、予定通り1週間後に業務を再開しました。当時160名いた従業員のうち震災で辞めたのは、九州に自主避難した1名のみでした。

水・電気・ガスのライフラインがみな大丈夫であったという運もありましたけれど、お客様（メーカー）、取引先の方々の応援と社員の頑張りによつていち早く復旧できたと感謝しています。

■みんなが幸せになるためには謙虚になって頑張ることが大事

— 経営理念についてお聞かせください —

当社の経営理念は“「株式会社アブクマ」に係わる全ての人の満足と幸せを目指す”です。これは、「株式会社アブクマ」に係わりを持つことに喜びと誇りを持ち、この会社を通して夢と希望を叶え、そして、皆が満足と幸せを手に入れることが出来る経営を目指すということです。

みんなが幸せになるためにはアブクマが本当に頑張らなければなりません。月並みになりますが、頑張るというのは、とにかく謙虚に周りに感謝をしながら仕事をしていくということが大事で、それ以外にはないと思います。うちの従業員にも「とにかく謙虚になれ」「稻穂のようにお米が稔るほど首を垂れるとは、まさにその通りだ」という話をよくしま

す。我々がきちんと仕事をすれば、その結果、雇用促進につながりますし、税金もたくさん払うこともできますし、すべてのことにつながっていくと思っています。

■従業員採用と育成には非常に苦労している

— 従業員はこの近辺の方なのですか —

小野町が半分ほどで、後は旧滝根町（現田村市）のほか、インドネシアからの研修生もいます。外国人のことをよく思わない方もいるかもしれません、うちの研修生は本当に良い仕事をしてくれます。外国人労働者と共生していかなければ、地方の過疎地の産業は成り立たないと思います。共生することで地域活性化を図ることができると考えます。

従業員採用には最も苦労しているかもしれません。応募サイトや転職サイトに登録していますし、何人か面接もしますけれども中々難しいです。また、若い従業員の採用につながっても、思い通りに育てあげることには非常に苦労します。

■読書や繁華街を歩いて感性を磨くこと

— 貴社の人材教育についてお聞かせください —

会社で出来る教育はもちろんですが、（第三者機関を利用した教育等含む）我々全員が自分自身で成長しようとする意識を持つことが非常に重要なという事を常に伝えています。毎年毎年成長し続けることが大事な事であり、そのためには「感性を磨きなさい」とよく言います、「感性を磨くためには、本を読む、音楽を聴く、映画を見る、美味しいものを食べる等々、自分で出来る範囲でとにかく経験をしなさい」と話をしています。社会に出ると、学校の先生が物事を教えてくれるわけではありません。自分で学ぶしかないのです。「時には東京銀座に行って1丁目から8丁目まで歩いて回ることも必要だよ、今、銀座にはどのような人がいるか、どのようなモノが売っているか、どのような美味しい店があるか、肌で感じるだけでも良い」と伝える事もあります。もちろん私自身も日々勉強ですので今申し上げたこ

とは自身でも積極的に取り組んでいます。とにかく全員で成長し続けることが会社の成長となり、福島県への貢献になると思っています。

■地道に力を蓄えて、地域の雇用の場としての使命を果たしたい

— 2027年に創業100周年を迎えられますが、今後についてお聞かせください —

まもなく100周年を迎えることで、先人の皆様には感謝しておりますが、「100周年だから何かやるぞ、何をいくら売るぞ」などと風呂敷を広げるような大それたことは考えておりません。150周年、200周年を迎えることができるよう、地道にコツコツと謙虚な気持ちで力を蓄えていきたいと思います。

現在、トランプ関税が当社にも大きく影響しています。仕事を続ける上では良い事も悪い事もあります。その際、一喜一憂する事なく、どんな場合でも謙虚に真摯に前を向いて進んでいく事を常に心がけています。そして、この福島県で雇用の継続をする事が、当社の使命だと思っています。更には福島県

の復興が図られるよう福島県の企業として貢献していきたいと考えています。

最後に本誌をご覧の皆様に株式会社アブクマという会社をご理解賜り、生意気ではありますが、福島県のすべての企業が、この福島を盛り上げる事を願い結びとさせて頂きます。



工場内は安全第一、扉から出入り厳守

インタビューを終えて

小松崎社長は話が上手くとても面白い方でした。そのような社長が真顔になったのは、工場見学で工場内を移動していた時に、「シャッターを上げた場所の下を通らずに脇の扉を通ることを徹底してください」と言う時でした。シャッターが落ちて頭上を直撃するようなリスクを避けるよう、安全第一ということが徹底されていました。

職人の手作業もあれば、最新設備のロボットが作業している工程もあり、昔ながらの町工場の雰囲気とDX化された近代的な光景が同居している工場でした。山の中の立地でアクセスが良くないという悪条件は復興道路開通によって解消されましたので、今後は地域の雇用の場として機能するとともに、福島県のモノづくりを支える企業として発展していくことが期待されます。

(担当：高橋宏幸)